

なぜツールブックが必要なのか

潮目が変わる

昨日まで普通に着ていた服が、ある日何となく場にそぐわないように感じる。そんな体験が誰にでもあるだろう。こう感じるのは、多くの場合自分の変化と周囲の環境が合わなくなったと感じる時だ。

文化とは社会の実態に合わせて人々がまとう服のようなもの。水の文化も同じである。

ミツカン水の文化センターが活動を開始したのは1999年1月。どちらかというところを日本を中心に「歴史に根ざした伝統的な水文化」と、現代都市・地域生活の「現代水文化」を紹介してきた。

水文化の多くは人間生活の歴史と重なっている。とはいえ、いまを生きるわたしたちが「水文化」と思っている多くは、高度成長期に意識化されてきたものだ。言い換えれば、急激に人口が増えたために、方々で住宅や上下水道をつくり、農村風景が稀少化してくる中で水文化が形成されてきた。

ところが、その生活者の意識がここに来て変化しはじめている。あえて言えば、とまどいだろうか。

いったい戦後の高度成長期とは何だったのだろうか？ これからの社会はどう変わるのだろうか？

2011年の東日本大震災後、潮目が変わり、日本の成長期に合った文化という服が合わないように思えてきたのだ。

文化の基盤が変わる

潮目が変わったのには理由がある。

いまの暮らしの基盤は、昭和30年代～40年代に整えられてきたものといっても過言ではない。水道、ステンレスキッチン、電気炊飯器、洋式トイレ、車、スーパー、コンビニ、ファミレス……。大量のユーザーに大量の水を届ける「大量水利用インフラ」が今も用いられ続けている。

しかし、遠方・周辺から人口が減少し、水道の更新は大変だし、耕作放棄された農地や空き家が大量に発生しているという現実もある。産業もグローバル化し、地方の中小企業が海外と直接取引している例も珍しくない。少子高齢化を背景にした環境の変化に、人々は、「柔軟で魅力的な水循環利用インフラ」を求めているように感じられる。

少子高齢化と共に見逃せない大きな変化が、生活のICT化、わかりやすく言えば「スマホ化」だ。いまは誰もが携帯電話、スマートフォンをもつようになった。「ミネラルウォーター

をスマホで注文し宅配で」など5年前には考えられなかったし、「遠くに離れているおばあちゃんとタブレットで顔を見ながらおしゃべり」といったことが現実になってきている。これは高齢者の生活を変えるし、若者文化も現に変わってきている。水文化はどう変わるのか。たいへん興味のある点だ。

少子高齢化とICT・スマホ化。これまで体験したことのない潮流の中で水文化はどう変わるか。視界を広げる必要が出てきている。

未来を見る目を変える

こういう時には、過去の延長でものごとを予想し考えてもあまりよい結果はでない。今までの常識の延長で考えるということは、人口が増え続ける、あるいは安定し続けるという前提で社会を考えるのと同じことだ。

また人口3,000万人だった頃の江戸時代のような「昔に返れ」と唱えた方が安心はできるのだが、それではいまの暮らしは成り立たない。便利な暮らしを知ってしまった私たちは、ライフスタイルを変えることはできても、生活水準を落とすことは至難のワザだ。

まずは、どんな未来で暮らしたいのか想像しよう。その未来から振り返り、現在から未来にいたるシナリオを考える。これがバックキャストと呼ばれる手法だ。

そのためには、現に変化しつつある時代潮流を踏まえつつ、まずはいまの水文化に関わるデータを見つめ、「何がおもしろいのか、注目すべき点は何か」を冷静に見つめる必要がある。「おもしろい」と思った点には、必ずといっていいほど「次の時代の文化の芽」が埋め込まれていることが多いのだ。「芽の発見」。これがこのツールブックの目的である。

この作業を私たちは、若いライターチームが中心となって、インターネットで手に入るような公開データで行うこととした。専門家でなくては解釈できないデータではなく、公開データでどこまで芽を発見できるか。ちょっとした冒険ではあるが、これなら、若いライターチームが感じている、これまでの着心地が悪くなった文化に手を加えるアイデアが生まれやすいだろうという目論見である。各テーマ毎に「おもしろい点」が一言記されている。

みなさまの目にどう映るか。気軽に読んでいただき、水文化を全体的に感じてもらい、本書が気づきの道具となる。これが企画者としての望みである。

多摩大学経営情報学部准教授(地域政策)

中庭光彦